

渋谷トリエンナーレ2010

——NO HOUSE NO LIFE , NO HOUSE NO LIFE——

文責 中島晴矢

「渋谷」という「悪い場所」

「渋谷」は、有象無象が居住する民家であり、フリースペースでもあるという、よくわからない「悪い場所」です。

榎木野衣が『日本・現代・美術』でうちだした概念「悪い場所」とは、「『歴史的問い』それ自体を去勢してしまうような『消極的』な悪循環」であり「閉じられた円環」、「ある非歴史的な『場所』の支配」でした。つまりヘーゲルの歴史はつみあがらず、クラインの壺的に反復してしまう。

「渋谷」もそんな「場所」です。そこでは様々な現象が生起するが、その悉くは積み上がり、いつのまにか元の木阿弥へと回帰している。出入りする人間は、画家、彫刻家、小説家、ダンサー、漫画家、パフォーマー、写真家、ミュージシャン、評論家…とは名ばかりの総じて「自称芸術家」であり、しかもその実、社会的には、フリーター、大学中退、プー太郎、ホスト、分裂病者、ゲイ、メンヘラー、貧者、キャバ嬢、ヒモ…要するにゴロツキに過ぎません。

しかし、そこにおいて、「悪さ」を自覚的に徹底したときに、「内部」と「外部」が反転し、捻れて、「閉じられた円環」から漏洩するような、名状し難いオルタナティブな「場所」になると、私たちはかんがえます。

「渋谷」に住む私たちは、ネット空間と異なり、生身の身体を媒介としたコミュニケーションに絶えず曝されるため、「自由・平等」と共に、確実に「友愛」を育んでおり、また、オタク的な文化を享受しつつも、そのみでは説明できない「ストリート」的リアリティを生きてもいます。これらによって、「渋谷」は、異なった意味での「悪い場所」になり得ます。

宇野常寛が『ゼロ年代の想像力』で、「死」「終わり」を射程に収めることによって、「終わりのなき（ゆえに絶望的な）日常」は「終わりある（ゆえに可能性にあふれた）日常」に変化すると言ったように、あるいは、榎木野衣が『反アート入門』で「流動的な生そのもののような芸術」を志向したように、「日本現代美術」における「悪い場所」性は、以下のように読み替えられるのではないのでしょうか。

つまり、「悪い（ゆえに絶望的な）場所」から、「悪い（ゆえに可能性にあふれた）場所」へ——。

そして、「渋谷」は、後者の意味での「悪い場所」です。

「渋谷トリエンナーレ2010」は、「悪い（ゆえに可能性にあふれた）場所」＝「渋谷」で行う、私たちなりの「LIFE IS ART」の営みなのです。

芸術である、だけど民家である、だから犯罪である

……………そんなことを考え、ジャンヌ＝クロード&クリストの「ランド・アート」を下敷きに、赤瀬川原平の「宇宙の梱包」といった「日本の前衛」のキッシュに依拠して、そして何より『すごいよ！マサルさん』という「ギャグマンガ」へのオマージュとして、民家である「洪家」に「布をかぶせ」ました。一軒家全体が真っ白い一枚布で覆われた様は、私たちからすればとても美しく、非日常的な雰囲気の中で送る日常生活は、何か心躍るような、非常に素晴らしい経験に思えたものです。

すると、大家さんが来て、強制退去を宣告されました。

かつての美共闘の闘士のようにバリケードを作って「闘争」することもできず、かといって、集団自殺するレミングスのように安易に「逃走」することもできなかった私たちは、「LIFE IS ART」にのっとり、日常の延長線上に位置するものとしての本質的な「逃走」＝「引っ越し」を目論みました。彦坂尚嘉の「デリバリー・イベント」の、集団発狂バージョンです。そのため、「洪家」の外部ばかりでなく、内部のものもすべて、ダンボールで「梱包」するはめに陥りました。

しかも、引っ越し先が決まらぬままに、夜逃げ同然で家を飛び出したため、「ストリート的リアリティ」を持った「場所」から、「リアル・ストリート」という「(非) 場所」へと、容赦なく投げ出されてしまったのです。

「悪い場所^{シブ・ハウス}」を喪失し、「ハウス・レス」となった私たちは、ある者はネットカフェ難民やファミレス難民となり、またある者は知人宅への居候となって、ブランキー・ジェット・シティばりに、単なる「悪いひとたち」へと相成りました。

しかし私は、ここであえてバカボンのパパのごとく、「それでいいのだ」と言いたいのです。なぜなら、私たちはもともと、「表現難民」だったのですから。

「布」によって文字通り家の「内部」と「外部」に「実在の境界線」を設定したことで、はからずも浮かび上がってきたのは、なにが芸術でなにが非芸術かという、「不在の境界線」でした。私たちにとっての「芸術」は、大家さんにとっては「非芸術」であり、もっといえば「犯罪」だったのです。

赤瀬川原平の「千円札裁判」にひとつの起源をもち、海外におけるバンクシーのグラフィティを筆頭としたストリートカルチャー、そして近年の Chim↑Pom の「ピカッ」や、果ては篠山紀信の路上ヌード撮影での逮捕にいたるまで、《表現》が必然的に孕まざるをえない、「芸術／非芸術」という境界線上で、とにかく、私たちは、なおも表現し続け、生き続けるしかないのです。

今回の「布」が、「芸術」であったか、あるいは「非芸術」であったかは、ひとまずどうでもいいことでしょう。

土壇場で、新天地を恵比寿の一角に見つけることができました。

ここで、「洪家トリエンナーレ2010」を決行します。